

# 図書館情報技術論 —ケースメソッドを用いた授業実践—

木内 公一郎  
Kinai Koichiro

キーワード：図書館情報技術論、ケースメソッド、システムライブラリアン

1. はじめに
2. 先行研究
3. 研究の目的と方法
4. 授業の概要
5. ケースメソッド
6. 参与観察による調査
7. 考察
8. 今後の課題

## 1. はじめに

平成24年4月から実施されている図書館情報技術論は、文部科学省「司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目一覧」 ([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/13/1266312\\_8.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2009/05/13/1266312_8.pdf) アクセス2015-11-24) によると「図書館業務に必要な基礎的な情報技術を修得するために、コンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料、コンピュータシステム等について解説し、必要に応じて演習を行う」とある。コンピュータとネットワークの基礎、情報技術と社会、図書館における情報技術活用の現状、図書館業務システムの仕組み(ホームページによる情報の発信を含む)、データベースの仕組み、検索エンジンの仕組み、電子資料の管理技術、コンピュータシステムの管理(ネットワークセキュリティ、ソフトウェア及びデータ管理を含む)、デジタルアーカイブ、最新の情報技術と図書館、以上10項目の内容を含む。

新しい科目であることから、各大学、短期大学において試行錯誤が続いている。科目のあり方や方法など、これから検討すべきことは多い。

## 2. 先行研究

### 2-1 「図書館情報技術論」に関する研究

この科目に関する研究は原田<sup>1</sup>の2010年の論稿「図書館情報技術論の基底」を端緒にして、吉田<sup>2</sup>、水島<sup>3</sup>、横谷<sup>4</sup>、菅原<sup>5</sup>、そして最も新しい研究として今井ら<sup>6</sup>の授業実践が発表されている。

これらの研究のなかで、原田の指摘は図書館界の現実を踏まえ、図書館司書養成教育のあり方について多くの示唆を提示している。以下に4項目に分けて引用する。

- ①「一般的なコンピュータやネットワークの技術ではなく、図書館業務を行う上で、またサービス展開を行う上での基礎的な技術について学ばせる必要がある」
- ②「現在、図書館業務システムは多くの図書館員にとってブラックボックスのようになってしまっているともいわれる。その仕組みを理解していないために適切な形で要望を出すことが困難となってしまっているなどの問題点も指摘される」
- ③「図書館が外部業者にシステム構築を依頼する際に考えなければいけないことなど、実用的な内容についても取り扱うことが望ましい」<sup>7</sup>
- ④「本科目においても、基礎的な情報技術の知識を身につけさせるだけでなく、身につけた知識を適切に応用することができる人を養成するのだということを意識した授業を行う必要がある。すなわち、図書館という場でどのような問題が発生しているのかを的確に把握する理解力、その問題に対して、どのような技術を応用していくことが有効かを考えることができる想像力、さらにそれを用いることでの図書館の活性化を図る企画力、変化する社会と図書館の状況に応じて柔軟に対応していく応用力を持つ人を養成することが重要であろう」<sup>8</sup>

①はコンピュータ、ネットワークの一般的な知識だけでは図書館ではあまり意味をなさないことを指摘し、図書館業務との関連において学ぶことの必要性を説いている。②は図書館の現場の課題を的確に指摘したものである。③は多くの図書館職員にコンピュータ、ネットワークの知識がないこと、外部業者と交渉しながらシステムを構築した経験が少ない図書館職員が多いことが背景として考えられる。④は図書館システムに関わる人材の養成という観点で必要な能力を指摘している。要点としては、第一に問題を発見することであり、第二に知識の応用能力であり、第三は情報技術を図書館サービスや経営に応用させる能力を指している。原田の見解は現状の課題を明確に指摘していると言えるであろう。

### 2-2 システムライブラリアンに関する議論

前節で述べた原田の指摘した必要な能力はシステムライブラリアンとしての能力と一致する。

システムライブラリアンとは、図書館におけるシステムの構築・運用の担当者のことである。これについては「情報の科学と技術」56巻4号(2006)において「システムライブラリアン育成計画」という特集が組まれている。この特集では冒頭において、次のようにシステムライブラリアンを定義している。a)業務やユーザーズを理解し、現場担当者に業務モデルを提案する。b)ベンダー等の外部委託業者を誘導して、内外のユーザーの満足度が高いシステムを構築し、運用、

改修のライフサイクルを循環させる。c) 資料の電子化や電子化された資料など、メディアを問わず利用者が必要とする情報を提供する環境をつくる。d) ユーザや職員に対してシステムやコンテンツ利用についてのトレーニングを行うこともある。<sup>9</sup>

さらに宇陀が「総論：システムライブラリアンをめぐる状況と課題」<sup>10</sup>のなかでシステムライブラリアンについて次のように述べている。

「図書館システムベンダーに依存せず、図書館員がアイデアを出すこと」

「システムライブラリアンに求められる資質は、技術ではなく、発想であること。技術に向いてしまう人はシステムライブラリアンに向かないこと」

「システムライブラリアンには、CIO (Chief Information Officer: 最高情報責任者) または (Chief Technology Officer: 最高技術責任者) のような視点が必要であること。すなわち経営戦略にしたがって技術開発をリードできること」

「システムライブラリアン育成には、網羅的、横断的、複眼的カリキュラムが必要であること、そのうち最も重要なのは複眼的な視野を持たせること」とある。

原田、宇陀並びに「情報の科学と技術」56巻4号(2006)の特集の定義をもとに、システムライブラリアンの役割をまとめると以下ようになる。

- ①情報通信技術に関する基礎的な知識
- ②情報通信技術を応用する能力
- ③企画能力 (システム構築の実務)
- ④図書館の内外を見渡すような広い視野
- ⑤図書館経営の視点
- ⑥システムに関する研修

以上、6つの役割を持っていると考えられる。本学の「図書館情報技術論」においては⑥を除く、①～⑤を中核的な概念として導入している。

### 2-3 「図書館情報技術論」の授業形態

次に先行研究ではどのような授業を行ってきたのであろうか。体験型の演習を取り入れて授業を実施している例としては、菅原<sup>11</sup>、今井<sup>12</sup>らの研究がある。菅原の研究は授業の中に体験を取り入れて、学生の理解を促進している。オープンリソースの図書館システムを導入し、学生に図書館システムを体験させる工夫を行っている。一方、今井の研究は、クラウド型の図書館情報システムをベンダーの協力を得て試験的に導入し、その操作を学生に体験させている。

このように意欲的な実践が生まれてきているなかで、本学では企画 (システム構築) に絞った演習を図書館情報技術論に取り入れた。この研究ではその妥当性を検証してみたい。

### 3. 研究の目的と方法

#### 3-1 研究の目的

システムライブラリアン養成という観点から構築された「図書館情報技術論」の授業としての妥当性を検討する。

#### 3-2 研究の方法

授業における学生に対する参与観察から得られたデータを分析し、授業の妥当性を検証する。

### 4. 授業の概要

#### 4-1 授業の概要

本学ではこの科目を2年前期に開講している。<sup>13</sup>システムライブラリアンを育成するという視点を中心に据え、以下のような授業を計画した。

- ①情報技術を体系的に学習し、理解する事を目的とします。
- ②システムライブラリアンの仕事とは何か。
- ③図書館システムを実際に企画し、チーム発表します。

#### 4-2 到達目標

到達目標としてはシステムライブラリアンとしての基本要件として、情報技術に対する理解及び図書館情報システムの企画力を設定した。

- ①コンピュータの基本構成、ネットワーク、インターネットの技術、最新の情報技術を理解できるようになる。
- ②図書館システムを企画できるようになる。

なお、評価に関しては、①を筆記試験、②は演習における取り組みの状況を評価対象にした。

#### 4-3 授業計画

表 1 図書館情報技術論授業計画 (2015年) <sup>14</sup>

1 はじめに	授業の目標、科目の背景などを説明します。
2 コンピュータ・ネットワークの基礎	ハード、ソフトの側面からコンピュータ、ネットワークの構造を理解します。(p6~11)
3 館内LANとインターネット	情報伝達の仕組み、構成要素 (p11~19、76~81)
4 コンピュータシステム管理	管理業務の内容(p20~25)
5 データベースの仕組み	DBの構造と構成要素 (p26~31)
6 図書館業務システムの仕組み	閲覧、蔵書管理システム、情報発信 (p32~37)

7 館内ネットワークの仕様書	仕様書の構成、見方、作り方 (p38～43)
8 電子資料の管理技術	多様な電子資料の保存(p50～55)
9 電子図書館とデジタルアーカイブ	事例紹介(p56～63)
10 最新の情報技術と図書館	ICタグ、自動書庫、電子書籍、拡張現実(AR)、モバイル技術 (p64～69)
11 Web2.0とLibrary2.0	図書館および図書館システムの未来を予測します。(p88～93)
12 ケースメソッド (1)	チームに分かれて図書館システムを企画します。
13 ケースメソッド (2)	チームに分かれて図書館システムを企画します。
14 ケースメソッド (3)	チームに分かれて図書館システムを企画します。
15 ケースメソッド (4)	発表会とまとめ

授業計画の基本構成は1～11回を情報技術、図書館情報システム、情報社会に対する理解の時間に充てている。この授業のハイライトとなるケースメソッドは4回を充てている。2015年度受講者数は23名である。

1回目：授業概要のほか、システムライブラリアンの役割について概説する。

またシステムは作るものという点についても強調する。

2回目：コンピュータやネットワークの基本構成を中心に説明する。説明ではコンピュータを選定する際にどこに注目すれば良いのかということに重点を置いている。仕様を読めるようになるというのがこの回の達成目標である。

3回目：LANの基本用語、構成を説明し、その発展した形がインターネットであることを強調している。インターネットの成り立ち、基本構成や用語の説明が中心となる。

4回目：システムライブラリアンの業務としての管理業務を理解することが目的である。中心テーマはセキュリティ管理である。

5回目：データベースの定義、書誌ファイルと索引ファイルの関係、データベースマネジメントシステムの機能を理解する。

6回目：図書館情報システムの具体的な機能を理解することが目的である。

7回目：実際に図書館システムを企画し、運営するプロセスを学ぶ。ケースメソッドで使う知識であることを強調している。また図書館経営との関連性も強調している。

8回目：8回目以降は応用編という位置付けで授業を進めている。ハードとしての電子資料をどのように保存するのかという課題を扱っている。

9回目：電子図書館、デジタルアーカイブの特徴を理解する。また既存の図書館情報システムとの関連などにも言及している。

10回目：新しい情報技術の紹介や図書館へ応用などを展望する。

11回目：図書館システムの将来像を情報社会の発展と関連させながら、今後の発展を展望する。

初回から11回までは講義が中心となるため、リアクションペーパーの回収を毎回行った。質問も多数寄せられ、その都度回答した。関心が高かったのが、情報セキュリティであった。とくに実際に公共図書館におけるセキュリティ問題も発生しており、具体例を交え、身近に感じさせるような講義を行った結果であると思われる。

## 5. ケースメソッド

### 5-1 ケースメソッドの概要

ケースメソッドとは、もともとロースクール（法科大学院）やビジネススクール（経営大学院）で行われている教育方法である。課題発見および解決、ディベート技術等を身につけていくことが目的である。図書館情報学教育とケースメソッドについて論じた研究としては高山ら<sup>15</sup>の研究がある。それによればケースメソッドとは「完全にケース・スタディ形式で提示された、たいへん特殊な問題に対して、実行可能な、そして正当と認められる解決を生み出す能力を養うものである」<sup>16</sup>

「ケースに提示される問題に対して、複数の選択対象となる解決が存在する中で、学生が主体的にかつ独自に選択を決定することを意味する」（高山等前掲論文）とある。複数の解決案の中から学生が自ら考え、決定するということである。

ケースメソッドを授業に導入した理由は以下の通りである。第一に図書館システムを構築するプロセスの疑似体験ができること。第二に学生自身が考え、答えを出すことに意義があること。第三に図書館システムを構築するプロセスそのものが課題発見や解決であり、ケースメソッドの長所を生かすことができる。第四に、高山らは「ケース・メソッドに不可欠なことは、複数の違った解決の方法が表明されているということである。」と述べている。実際、現場のシステム選定においても、複数の選択肢から決定するというプロセスを経ることが多い。このことからケースメソッドとシステムの企画業務の親和性を見ることができる。

15回のなかで講義も入れるとケースメソッドに当てられる時間は限度があり、4回が最大限である。そこで、まず「問い」と「ゴール」のイメージを最初に説明した。「問い」とは解決すべき問題が何かを説明した文章である。ゴールとは学生自身が考えだす答えの形式である。つまり具体的なシステムの選定であり、これによって図書館の何が変わるのかという答えを出すことである。

さらに1回ごとの授業の中で何を検討するのか、明確にし、その課題を授業時間内で実施できるように配慮した。以下が検討のスケジュールである。

問い：この図書館の将来課題：2年後に図書館システムの契約更新を控えている。「S町図書館の使命」に基づいて、サービスや機能の充実を図りたい。

第1回この図書館の長所と短所はどこか。（図書館を取り巻く環境、組織、サービスを検証する）

第2回達成目標を決める。この図書館システムに何を追加するとよくなるのか。

第3回システムの選定（選択肢から選ぶ）

第4回発表

まず、図書館内外の現状分析を行って、長所と短所を明確にする。それを踏まえ基本的な要求仕様を作成する。そして要求仕様に相応しいシステムを選定するというプロセスになっている。以下は授業のために作成したケース（事例）である。<sup>17</sup>

### 図書館事例

(町の概要) \*以下、すべて架空の地域、図書館として設定しています。

A県の中央部にS町はあります。面積は13平方キロメートルで南北6キロメートル、東西が3キロメートルの小さな町です。

人口約5万人ですが、1年間に約千人ずつ増えています。市制施行も将来はあるかもしれませんが。また、東京へ電車で1時間以内に通勤できることから、若い家族がとくに増えています。町内にはJR線が南北に縦断しています。

就業人口の比率

産業	比率
第一次産業	4. 2%
第二次産業	52. 6%
第三次産業	43. 2%

輸送の便が良いこともあって大手企業の工場も多く、工業出荷額は県内町村では第1位です。よって税収も増えており、町の財政力指数は1. 30の大変豊かな町です。

「都市化の進む東京近郊の町」というイメージの町です。

(図書館を取り巻く環境)

町には大型書店が2店あります。またインターネットの利用率は全住民の90%です。

(S町図書館の使命)

1. だれもが図書館を自由に利用することができます。  
年齢、性別、国籍、障がいの有無に関わらず自由な利用ができるように努めます。
2. 地域文化の集積と発信を行います。  
図書館は地域文化、地域資料の拠点であるという認識に立ち、あらゆる資料の収集と発信に努めます。
3. 読書を通じた心豊かな生活の実現を応援します。  
子どもたちの成長には読書を欠かすことができないという認識にたち、生涯にわたって本に親しみ、文化的な生活が送れるように努めます。

(S町の図書館の概要)

町のちょうど中央に位置する。駅から歩いて10分。

職員数は10名

全蔵書：20万冊

資料購入費（図書・雑誌の購入用）：1千万円

住民一人当たりの貸出冊数：年間2.3冊

利用者として図書館に登録している率：S町住民全体の11.3%

(図書館サービスの概要)

1. 閲覧サービス

一人10冊3週間借りることができる。予約はできるが現行のシステムではインターネット予約ができない。貸出延長もインターネットからやりたいという要望も多数寄せられている。

2. レファレンスサービス

図書館で実施しているが利用件数は少ない。認知度も低いという調査結果も出ている。

3. 児童サービス

週1回日曜日の午前中、ボランティア団体との共催のおはなし会を実施している。参加人数は毎回10名前後（保護者も含む）。参加者を更に増やして、回数も増やしたい。

4. ヤングアダルトサービス

中学、高校生向けの展示図書コーナーをつくり、利用を呼びかけているが利用は少ない。  
コーナーの一角にノートを置いて、自由に記入してもらい、中高生と職員のコミュニケーションを図っている。時々書き込みがあるので、それなりの関心があることがわかる。

5. 課題解決型サービス

ビジネス支援サービスを充実させたいと考えているが、現在は小さなコーナーがあるだけである。

6. 障がい者サービス

目の不自由の方へのサービス拡大が課題となっている。点字図書、録音図書の充実を図っているがまだまだ少ない。また目の不自由な方でも検索できるようにしていきたい。

(現行の図書館システムで、既に実現している業務とサービス)

閲覧業務（貸出、返却、予約）、資料の発注受入（書店とオンラインで接続）、目録の作成（TRCMARCを利用）、予算管理、WebOPAC

この図書館の将来課題：2年後に図書館システムの契約更新を控えている。「S町図書館の使命」に基づいて、サービスや機能の充実を図りたい。



まず自治体の概要や特徴をまとめ、その後に図書館の概要を説明している。地域と図書館の関係をとらえさせることが目的である。また、サービスや業務の課題を列挙することで、現状分析を行いやすいように工夫している。

## 5-2 指導における留意点

### 5-2-1 チーム編成

4～5名を目安として、メンバー構成も教員がすべて指定した。普段交流の少ない学生同士を組ませることで、普段とは違った交流が生まれるように配慮した。またリーダー、記録係を決め、チーム内コミュニケーションの円滑化を意図した。

### 5-2-2 毎回の到達点を明確にする

検討する日数が限られていることから90分の時間内に達成すべきことを明確に指示した。

第1回 図書館の長所と短所はどこか。(図書館を取り巻く環境、組織、サービスを検証する)

初回はケースの読み込みと理解を十分にした上で、長所と短所とまとめさせる。この場合、図書館の長所と短所だけでなく、周辺環境との関わりも見るように指導した。

第2回 達成目標を決める。この図書館システムに何を追加するとよくなるのか。

この回では「達成すべき目標を具体化する」という到達目標を掲げ、具体的に①図書館の長所を伸ばし、短所を改善するための方策(情報通信技術を利用する)②S町図書館使命の具体化(情報通信技術を利用する)という具体的な目標2点を明確にした。

第3回 システムの選定

あらかじめ選択対象となる3つの図書館情報システムを提示した。表に製品名、メーカー、アピールポイント、製品のURL、価格、契約期間、年間保守料の項目を提示した。3つの図書館情報システムは実際に販売中のものである。価格や契約期間、年間保守料については、一般には公開されていないため、筆者が独自に設定した。対象を絞ることで選定にかかる時間を節約するためである。前回で設定した具体化された達成目標(要求仕様)に相応しいシステムを選択する。その際に選定理由を明確にするように指導した。

実際の検討作業では製品ホームページを開き、製品仕様とあらかじめ設定してある達成目標と付き合わせながら、検討を行った。

第4回 チーム発表

発表時間は10分である。発表の構成は第1回から3回までの内容を説明するように指導した。特に現状分析からシステム選定までが論理的につながっているように指導した。

発表の内容 1. 現状分析:長所と短所 2. 達成目標 3. 選定した図書館情報システムについての説明(選定理由を明確にする) 4. 図書館情報システム以外で計画していること(WebsiteやSNSなど) 5. まとめ(この計画を実施することによってこの図書館はどのように変わるのか(良くなるのか))

## 6. 参与観察による調査

### 6-1 第1回 現状分析：短所と長所を明確にする（2015年6月26日）

教室内で計5チームに分かれ、ケースの分析を行った。教員からはケースを徹底的に読むこと、ケースに書いてあること以外の事柄を類推しないように指導した。実際に観察をしてみると、実在する自治体をモデルにしているのではないかと推測し、実際にそれを探し出そうとするチームや学生も見られた。これはケース内で分析をするという範囲を超えてしまうため、くり返し指導を行った。またチーム内議論では、長所よりも短所を探そうとする傾向が強く見られた。学生にとって欠点を探すことは簡単だが、長所は他の図書館との比較から見出すことが必要になってくるため、意見が出にくいという面もあったと考えられる。このため「日本の図書館」（日本図書館協会刊）で同規模の図書館と調査し、比較検討するように指導した。

### 6-2 第2回 達成目標を考える（2015年7月3日）

具体的に指示は①図書館の長所を伸ばし、短所を改善するための方策（情報通信技術を利用する）②S町図書館使命の具体化（情報通信技術を利用する）の2点である。実際のシステムを企画する段階においては、要求仕様書作成の初期段階という位置付けになる。②について言及したのは学生に「図書館経営」を意識させ、経営とシステムは一体の関係にあることを理解させ、要求仕様書に盛り込ませることを意図している。

授業においては、実際に市販されている図書館情報システムや地域の図書館システムの調査を同時並行させている。仕様を考える段階においては、コンピュータシステムの様々な機能を知ることが必要だからである。インターンシップ等で実際に図書館システムを操作する機会はあるが、閲覧、検索機能に限定されてしまうことが多い。そのため図書館システムに関するイメージは具体的で鮮明ではない。

システム調査を同時並行することで、チームおける議論は具体化され、大まかな案は作成することができた。

### 6-3 第3回 システムの選定（2015年7月10日）

3種類の市販図書館システムパッケージを提示し、その中から選択し、検討した。検討手段としては各チームにiPad一台を配布し、各システムの紹介Websiteを閲覧し検討する。検討のポイントは達成目標を実現できるシステムを選ぶことである。

この回については比較的短時間で検討が進み、すべてのチームでシステムがほぼ決定した。

### 6-4 第4回 チームによる発表（2015年7月17日）

発表はPowerPointを利用することを義務付け、1チームあたり、10分の発表時間を設けた。評価の視点は①現状分析からシステムの選択に整合性と一貫した流れがあることである。つまり現状分析から達成目標、それに基づくシステム選定に論理的なつながりが見られるのか。②この計画が図書館経営やサービスにどのような変化をもたらすのかという点に注目した。

整合性や一貫性の面では5チーム中3チームにおいて整合性が見られた。図書館情報システム以外で計画していることについては、SNSを用いた発信、児童サービス、ビジネス支援サービスの充実を主張していた(5チーム)。この計画を実施することによってこの図書館はどのように変わるのか(良くなるのか)については4チームが具体的な効果について言及した。

ただし、プレゼンテーションの内容、PowerPointによるスライド作成についてはいくつかの課題が見つかった。まず、練習不足による不慣れから、すべてのチームにおいてスムーズな説明できていなかった。

スライド作成については、見やすさへの配慮(スライド内の文字数、フォント、大きさ、色)が全てのチームにおいて欠けていた。

PowerPointによる発表はゼミなどで経験があるという前提で授業を進めた。しかし時間的な余裕がなかったこと、一部のチームでは内部のコミュニケーションが十分ではなく、資料を忘れたりすることもあった。このようにチーム内におけるコミュニケーション、仕事の分担については機能しているチームとそうではないチームに分かれた。後者については、発表用資料作成を一人で行い、他のメンバーの関与が薄い傾向が見られた。

質疑については発表ごとに2~3回の質問が出ていたので、高い関心を持って、発表を聞いていたことが窺われる。

## 7. 考察

### ～システムライブラリアンの概念を導入した授業について～その妥当性

授業計画の面については、「司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目一覧」に示された授業概要の必要な最低限を満たしている。

そして実際の授業については計画どおり実施された。その中で注目したことは、講義の部分と演習(ケースメソッド)の部分が学生のなかでどの程度つながりがあったのかということである。つまり情報通信技術やシステムの企画、図書館経営などの講義で学習した知識の応用という側面である。この点については例えば、講義で取り上げた「デジタルアーカイブ」を学生自身が考えて企画の中に取り入れている。また図書館経営の視点も現状分析や達成目標を検討するなかで取り入れている。当初の授業目標はある程度達成できていると思われる。

## 8. 今後の課題

課題としては第一に日程の問題である。ケースメソッドについては4回では若干窮屈なスケジュールであるという実態は否定できない。15回の中で回数を増やすことができるのか、検討してみたい。

第二の課題は学生によるチーム運営である。機能し、結果を出すチームとそうではないチームにはどのような差があるのか、検討が必要である。

第三の課題は学習環境の整備である。授業は30人定員の教室で行われたが、無線LANの設備がないことで、iPadがインターネットに十分につながらず、調査が滞ることもあった。また、

机や椅子はグループワークに適さない形状である。いわゆるアクティブラーニングに適したPBL教室やラーニングコモンズの設置が不可欠である。

本研究は参与観察によって、学生の学習状況の調査研究を行った。次年度は参与観察と共に、学生へのインタビューを実施し、授業目標の達成度やチーム内におけるコミュニケーションの状況を調査研究する予定である。(了)

## 注

- <sup>1</sup> 原田隆史. 図書館情報技術論の基底. 日本図書館協会図書館学教育部会報 No. 95(2011) pp3-7
- <sup>2</sup> 吉田大介ほか. 司書課程科目「図書館情報技術論」の科目内実の展開構想. 情報学. Vol. 8 No. 2(2011), pp32-38
- <sup>3</sup> 水島章広. 新司書課程「図書館情報技術論」教育の枠組み. 自由が丘産能短期大学紀要. No. 44(2011), pp1-17
- <sup>4</sup> 横谷弘美. 図書館と情報通信技術をめぐる(2): 省令科目「図書館情報技術論」に関する考察. 情報学. Vol. 9 No. 2(2012) pp27-34
- <sup>5</sup> 菅原真悟. 図書館情報技術への関心を高める授業実践-「図書館情報技術論」に体験的な演習を組み入れる-. 法政大学資格課程年報. No. 3(2013) pp9-19.
- <sup>6</sup> 今井福司ほか. クラウド上に設置した図書館情報システムを用いた授業実践. 情報の科学と技術. Vol. 65 No. 7(2015) pp313-318
- <sup>7</sup> 原田前掲論文
- <sup>8</sup> 原田前掲論文
- <sup>9</sup> 特集: システムライブラリアン育成計画の編集にあたって. 情報の科学と技術. Vol. 56 No. 4 (2006), p149
- <sup>10</sup> 宇陀則彦. 総論: システムライブラリアンをめぐる状況と課題. 情報の科学と技術. Vol. 56 No. 4 (2006), p150-154
- <sup>11</sup> 菅原前掲論文
- <sup>12</sup> 今井前掲論文
- <sup>13</sup> 図書館情報技術論は基礎科目という位置付けである。1年次に開講している大学も多いが、本学では応用的な科目として2年次に開講している。新しい司書課程は単位数も増え、4年制大学のように履修期間を長くとれない短期大学における開講のあり方については別途検討が必要であろう。
- <sup>14</sup> 教科書は二村健他著 図書館情報技術論(ベーシック司書講座・図書館の基礎と展望2) 学文社刊行を使用している。授業計画のページ番号は教科書のページを示す。
- <sup>15</sup> 高山正也、磯部修子. 図書館・情報学におけるケース・スタディを用いた教育の有効性. Library and Information Science. No. 23 (1985) pp17-40
- <sup>16</sup> 高山らはプロブレムケーススタディという問題解決教育の方法を「ケース・スタディ」と

呼んでいる。そして「ケース・スタディ」のより具体的な教育方法を「ケース・メソッド」と称している。拙稿においてもこの定義を踏襲している。

- <sup>17</sup> このケースでは下記の図書館事例を参考にしたが、あくまでも架空の地域、図書館として設定している。

大塚敏高. コンピュータを使わなくても可能な小自治体でのシステム化ー神奈川県寒川町の事例. みんなの図書館. No. 169(1991. 06) pp2-9